**政治思想基礎　第八講　ホッブズ問題　─ホッブズと近代**

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　法学部　萩原能久

http://www.law.keio.ac.jp/~hagiwara/　　　　　　　　　　　　　　　　　　hagiwara@law.keio.ac.jp

**Ⅰ ホッブズ問題…**方法論的個人主義の問題

社会的なものをあらかじめ個人のなかに埋め込まずに、いかにして社会が、そうした個人の合理的選択（自己の効用の極大化）の結果「創出」されるかという議論が持つジレンマ

→人間が他人に対して狼人間であるという自然状態からスタートしている

・ゲーム理論における囚人のジレンマ

game.tiff

→人間の意思決定を数学的にモデル化したも

の

→+- = 0の状況が生み出される状態

→帰結が生まれる状態

→最大の特色→戦後処理をしてこなかったということ

→ソ連は参加していない

→韓国は日本領土

→サンフランシスコ講和条約に関係ない国が領土主張をしあっている

→どちらが正しいのか、→戦後処理がしっかりしていない

→中国と折り合いをつけていく

→日本領土にしていく

→沖縄県を分割して、中国領と日本領に分けていく

→中国に引き渡していく

→領土問題は両方が主張していく

→ゲームごと作り上げていく

→人間の行動がどのように変わるのか

→数字を操作

→ゲーム理論における囚人のジレンマ

→信頼もない

→取り調べが始まる

　　もし相手が必ず黙秘することを知らない限り、

　　相手が自白した場合の大きな損を考えて

　　これを避けるため双方が自白する。←これがこの数学的モデルの違い

→囚人のジレンマ→ホッブズ→パラレルである

→囚人のジレンマ→自然状態から出発して信頼感

→コミュニケーションも存在しない

→社会を作り出す

→囚人のジレンマ→相互確証破壊が起こりうる状態

→核兵器開発が起こりうる状態

→冷戦時代に起こる

→核兵器開発に起こりうる

→核軍拡が起こっている現代→これと当てはまる、上記のゲーム理論は

→ジレンマの解消→アメリカとソ連

•ジレンマの解消

　1.合理主義仮説

　2.方法論的個人主義（特にそのバリエーションとしての利己主義仮説）

→人間は人間に対して狼であるという状態が前提

　3.信頼

　4.没コミュニケーション

→米ソの緊張における、キューバ危機→核戦争の危機が最大限に高まった。

→相互確証破壊

→お互い軍備を大きくしようしていた

→「自分が損をしてもいい」、「面白いから、非合理的な理由」←これらがボツコミュニケーション

→ギャンブラーの存在

→ハイリスク・ハイリターン

→合理的な選択

→得るものが大きい

→ギャンブラーの考え方→リーマンショックみたいなことが起きる

→合理主義的仮説とは反する

•方法論的個人主義と全体論

　　全体＝部分の総和？→部品の働きを解明していく→組み立て方が違うと違うものになりがち

　　方法論的個人主義…「合成の誤謬(fallacy of composition)」？

→合成で違うものができがち

→方法論的全体主義

→対極にある説明の原理

→国家を大きな人間に見立てている

　　他方で全体論が持つ「国益」「公益」等の擬人化された観念のもつイデオロギー性

→国家を大きな人間に見立てている

→国家の利益は国民の中に還元されないといけない

　　「狼としての人間」（エゴイズム仮説）を棄却する必要性

→ナチの御用学者

　　Carl Schmitt問題

　　「真の政治理論とは、すべて、人間を『悪なるもの』と前提する」。

　　・・・「万人の万人に対する戦争」こそ政治的な思想体系の基本前提？

→有名な富と敵の区別をすることが大切

→他者に対して狼

→仮説

→シュミット

→利己心仮説

→集合的仮説

→決め方の論理

　　現代社会科学（特に合理的選択論）の病

利己心仮説という亡霊におびえ、自らの公正化志向をゆがめにゆがめて、不平等是正を世間で一番通用する利己的主張の体裁を通して実現しようとする。その結果、欲望の増大、地域エゴ、羨望の合理化へと社会が突っ走ることになる。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　佐伯胖『「決め方」の論理』265頁

合理化を社会が突っ走ってしまった

→社会科学者→自分の経済的な利益だけで自己効用化をしているという味方

→この人間モデルを前提にしているということ

自己中心主義的人間

(その野心と孤独、肉体的衝突とボツコミュニケーション)

個人主義　＝　利己主義(全体は一人のため)

全体論 = 利他主義??? (一人は全体のため)

**Ⅱ　ホッブズの「正義論」**

•アリストテレスの正義論…市民の討論による不正なノモスの理性的修正

→不正なノモスの理性的修正

→

　　全般的正義：「善き人」が果たすべき義務

　　特殊的正義

　　　　　　／　配分的正義justitia distributiva：比例的平等性　に応じて

　　　　　　＼　矯正的正義justitia commutativa：算術的等価性　平等に受ける、報酬を

　　配分的正義＞矯正的正義（正義の原形式）

→最初は前者、その前者を是正するためにあるのが後者

•ホッブズの目的論的自然法

　　矯正的正義（交換的正義）＝契約者の正義‥‥「契約」遵守に起因

　　配分的正義＝裁定者の正義‥‥「信約」遵守に還元される

→約束を守る、(第三自然法)ということに還元される

→自然権に従属するものとしている

→ホッブズにとって正義とはホッブズ的な正義の形式

→形式

→対極にあるのが義務論

→義務論(deontology)　←　→ 目的論(teleology)

→約束を守るということの目的

→理由なし

→なぜ、約束を守らなければいけないのか

→義務論　→　その行為自体が大切だからという見方

•正義＝「約束を守る」…自然法の一項目（第三自然法）

　ホッブズの自然法は自然権に従属：究極的には「自己保存」のためのもの。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（義務論的自然法の目的論的再定式化）

しかし「自己保存」は本当に「究極的な目的」たりうるか？

　　目的論的な道徳的命令はありうるか？（仮言命法的）科学的倫理学？

　　そもそもホッブズの自然法は内容的にはローマ法以来の伝統的法観念と異ならない。

→人々の安全と平和を保障してくれるもの

→自分の命が危ない　→　自己保存の同期に突き動かされる

→敵前統合を動かすもの

→甚だ疑問

→警察官や消防士

→自分の命が欲しいからといって逃亡してはいけない

→多くの場合は死の恐怖に瀕している

→科学的道徳がありうるのか

義務論 :カント「定言命法」→いつでもどこでも妥当する命令

→法や道徳は「定言命法」あるため従わなければいけない

仮言命法　：自己保存をしなければ　→　医者　→　酒とタバコを控えなさい

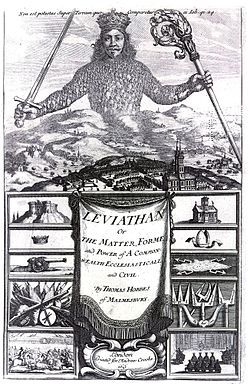
→「if ~ 」の説が入る

→

科学と倫理…個人主義的な利他主義の可能性、あるいは科学的倫理学？

「仮言命法der hypotethsiche Imperativ」←→「定言命法der kategorische Imperativ」

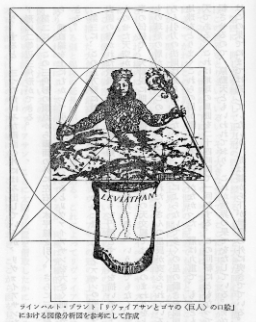
規範を事実から導出できるか？…「自然主義の誤謬」(G. E. Moore『倫理学原理』三和書房)



→事実から規範や道徳を導き出そうというもの

**Ⅲ ホッブズの自然法**…無神論的唯物論者も必要とする神（超越者）

ホッブズと隠れた神



→巨人→宗教と世俗を双方を両手に持っている

→リヴァイアサン

→人民の方を振り向かない形で書いてある

→銃と軍旗

→協会と種競合

→ギリシャ以来

→地上の人間がした過ちに対して行なっている

→異端審問

•『リヴァイアサン』の口絵

　　個々の人間を部品として成立した「人工的人間」

　　としての大怪物リヴァイアサン

　　平和と防衛とを人間に保証する地上の神

→二種類の異なるものがある

→チャールズ２世、検定バージョン

→この療法のバージョンにおいて、人々は国王の方を見ている

→読み手であるチャールズ２世の方に見ている

→献呈バーもどっちも正しい

しかし、、、、

→巨人って誰？

→リヴァイアサン

→チャールズ１世、クロムウェル

•リヴァイアサンをイコノロジーする　　参照：仲手川良雄『歴史のなかの自由』

→　正方形の対角線をとると、リヴァイアサンのみぞおちになる

→リヴァイアサン→冥界、死者の国にも及ぶ

→宇宙にはリヴァイアサンの上に神の権力がある

→宇宙観が描かれている

→地球は宇宙の中心になる

→しもべとして様々な惑星がある

→これが天動説的考え方

　ダンテ→天国の構造を解いた、第１０点に分けて何をしていくのかを考えた

→その10点は他の惑星を指している

　　Leviathan: 現世での神の代理、中継ぎ

ホッブズの神　→　政治理論は「超越者」を必要とするか？

→自分自身は法を作り出す必要がある

•「神学」から離脱した「近代的」政治理論は自らが神になることを意味した。

このことはホッブズの「自然法」の性格にも見て取れる

→自然法は理性から考案された内在的なもの

→現代人→natural law →自然法則→科学的な法則性にも捉えられるもの

→正しさの根拠

→他者に危害を加えることは法によって禁止されている

→道徳原理として理解すべき

→心の中で思っただけではない、外面的に現れた行為

→それのみが自然法の中で適用される

→道徳的にはいかがわしくない

→道徳を裁くのは自分の両親である

→法の外面性

→道徳と法の関係

→

　　「法」ならぬ自然「法」の拘束力はどこから？

　　1. 理性の命令

　　2. 神の命令

どちらの解釈をとっても矛盾が生じる

•問題は実定法の正しさの根拠　＆　道徳と法の関係　→　自然法論と法実証主義

　Moralism vs　Harm principle(他者への危害を第一に考える)　危害原理 (J.S. Mill)

→思っただけで処罰→全体主義の究極形

　道徳原理　vs　禁止・命令

　内面の法廷　ｖｓ　外面の法廷？

　Natural law自然法という問題：自然法と自然法則、あるいはピュシスとノモス

→今日のこの双方がないがしろになりがち

→自然法の衰退、神　→　DNA　→自然法則が人間を拘束しうる要因になりつつある

→外在的に人間を縛り付ける要因

→自然法則性

→科学的に支配

→全体主義の問題が生じする傾向s

ドイツ語のNaturrechtとNaturgesetz

法と権利、義務と自由

「自然法」の衰退と「自然法則」の支配

「歴史法則」（マルクス主義）、「自然法則」（ナチズム）の「法則性」を実定法の根拠として発動させ、貫徹される「全体主義」・・・Ｈ．アレント『全体主義の起原』

\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*参考文献\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*

萩原能久「政治的なものの概念」、萩原能久編『国家の解剖学─政治学の基礎認識』、日本評論社

J.W.N.ワトキンス『ホッブズ─その思想体系』、未來社

岡田章『ゲーム理論・入門─人間社会理解のために』、有斐閣アルマ

ウイリアム・バウンドストーン『囚人のジレンマ─フォン・ノイマンとゲームの理論』、青土社

佐伯胖『「決め方」の論理─社会的決定理論への招待』、東京大学出版会

テッサ・モーリス・スズキ『批判的想像力のために：グローバル化時代の日本』、平凡社ライブラリー

ジョージ・E. ムーア『倫理学原理』、三和書籍

仲手川良雄『歴史のなかの自由』、中公新書

ジョン・スチュアート・ミル『自由論』、岩波文庫

ハナ・アーレント『全体主義の起原』、みすず書房